自身も産駒も世界レベルで活躍

オルフェーヴル

2008年生　栗毛　生産／社台Co白老ファーム　繋養先／社台スタリオンステーション
競走馬時代の主な勝ち鞍／2011年皐月賞、日本ダービー、菊花賞、2011・13年有馬記念、2012年宝塚記念

オルフェーヴルってどんな馬？

牡馬クラシック三冠、11、13年有馬記念、12年宝塚記念を制したGI·6勝馬。それに加えて、凱旋門賞2年連続2着と世界にもその強さを見せつけた、まさに歴史的名馬といえる一頭だ。ただ、その強さの裏では新馬戦や菊花賞のレース後に主戦の池添騎手を振り落としたり、阪神大賞典の2周目向正面で逸走したりと、父ステイゴールド譲りの気性の悪さもトレードマークであった。記録にも記憶にも残り、競馬ファンを虜にした競走馬こそオルフェーヴルである。

父ステイゴールドはサンデーサイレンスやPrincely Giftから柔らかさを強く引き継いでいたが、その反面、頑強さに欠けたやや非力な競走馬だった。それを解消するための最善手が母母父ノーザンテーストを増幅する配合で、ウインブライトやレインボーライン、そしてゴールドシップ(ノーザンテースト≒The Minstrel)もこのパターンを踏襲している。本馬もノーザンテーストを4×3でクロスしており、全兄ドリームジャーニー同様、ピッチ走法で力強く非力な面はまったくない。「ステイゴールド×メジロマックイーン」のニックスは有名だが、メジロマックイーンはノーザンテーストをクロスするうえでの緩衝材的役割が強く、オルフェーヴル自身の競走馬としての本質を探るうえではノーザンテーストの4×3というのが外せないポイントとなっている。四肢が力強く、ピッチ走法で、有馬記念の4角で馬群をのみ込む姿が歴代の勝ち馬の中で最も似合うのがオルフェーヴルという競走馬であった。

ステイゴールド 黒鹿毛 1994	*サンデーサイレンス 青鹿毛 1986	Halo	Hail to Reason	Turn-to
				Nothirdchance
			Cosmah	Cosmic Bomb
				Almahmoud
		Wishing Well	Understanding	Pharamond
				Pretty Ways
			Mountain Flower	Montparnasse
				Edelweiss
	ゴールデンサッシュ 栗毛 1988	*ディクタス	Sanctus	Fine Top
				Sanelta
			Doronic	Worden
				Dulzetta
		ダイナサッシュ	*ノーザンテースト	Northern Dancer
				Lady Victoria
			*ロイヤルサッシュ	Princely Gift
				Sash of Honour
オリエンタルアート 栗毛 1997	メジロマックイーン 芦毛 1987	メジロティターン	メジロアサマ	*パーソロン
				*スヰート
			シェリル	スノッブ
				Chanel
		メジロオーロラ	リマンド	Alcide
				Admonish
			メジロアイリス	ヒンドスタン
				アサマユリ
	エレクトロアート 栗毛 1986	*ノーザンテースト	Northern Dancer	Nearctic
				Natalma
			Lady Victoria	Victoria Park
				Lady Angela
		グランマスティーヴンス	Lt. Stevens	Nantallah
				Rough Shod
			Dhow	Bronze Babu
				Coastal Trade

芝	ダ	距離	成長	昇級	短縮	延長	多頭	少頭	内枠	外枠
C	C	1700～	晩成	C	D	B	C	C	B	C
直長	直短	急坂	平坦	芝悪	ダ悪	休明	間詰	その他		
C	C	C	C	A	D	C	C	ブリンカー：A		

馬券のトリセツ① 重い馬場

オルフェーヴル自身が不良馬場のダービーを勝利し、2度の凱旋門賞もかなり重たい馬場での2着。父ステイゴールドも道悪巧者を多く出したが、本馬の産駒も道悪を得意とする馬が多い。エポカドーロが制した18年皐月賞は稍重発表ではあったが、かなり時計のかかる馬場での開催。道悪に限らず、時計のかかるタフな馬場では要注意だ。

また、父同様に洋芝も得意。特に雨季が重なり、水はけも良くない函館での成績は超優秀。1800m以上に限れば、複勝率47.2%、複勝回収率131%とベタ買いでプラスになる。

さらに期待するのは海外競馬への適性。本馬自身、フランスで強い走りを見せたが、本馬以外にもナカヤマフェスタやウインブライトなどステイゴールド系産駒の海外競馬での強さには特筆すべきものがある。将来的には本馬の産駒からも海外GI馬が出ることを期待している。

馬券トリセツ② ダート

父ステイゴールドや全兄ドリームジャーニーは典型的な芝種牡馬。ただ、本馬はダートでの好走馬を多く出しており、現状はダートの方が好走率が高いほど。ステイゴールドやドリームジャーニーは軽量種牡馬だったことがダート適性の低さに繋がっていたのかもしれない。本質的には芝血統でダートの大物は期待薄だが、下級条件でスピード不足の馬のダート替わりには注目して損はない。

馬券トリセツ③ 中距離版ダイワメジャー

ノーザンテースト的な粘り強さがあり、力のいる馬場も苦にしない。馬格のある馬ならダートもこなす。この特徴は非常にダイワメジャーと似ている。何よりこの2頭の共通点を物語るのが勝ち鞍における4角5番手以内率。ダイワメジャーは約79%と現役種牡馬屈指の先行型種牡馬であるが、オルフェーヴルも約74%とかなり高い数値。父ステイゴールドが60%だったことを考えれば、いかに高い数値かがわかるだろう。ノーザンテーストの影響を強く受けている種牡馬同士、適性も非常に似ている。距離適性はオルフェーヴルの方がやや長いことから、サンプル数が集まるまでは中距離版ダイワメジャーという認識で大きく間違うことはないだろう。

配合のトリセツ① 自己主張型

先述の通り、本馬はノーザンテースト的な特徴を強く伝え、同じくノーザンテーストらしさを伝えるダイワメジャーと似た傾向にある。そのため、ダイワメジャーもそうであった通り、非常に自己主張の強い種牡馬といえそうだ。今のところは自身から瞬発力を差し引いた産駒を多く出している印象。エポカドーロやサラス、エスポワールあたりを標準型とみるのがいい。

配合のトリセツ② Nureyev≒Sadler's Wells

自己主張が強い中でも注目したい配合がNureyev≒Sadler's Wellsを持つ牝馬との相性の良さ。これはオルフェーヴルの母母エレクトロアートがNorthern Dancer、Lt.Stevens(=Thong)、Hyperionの組み合わせを持つため、同じくそれらを持つNureyevやSadler's Wells(=Fairy King)とは非常に相性がいいわけだ。ラッキーライラック(17年阪神JF、19年エリザベス女王杯)やサラス(19年マーメイドS)、エスポワール(19年ターコイズS2着)など多くの代表産駒がこのパターンに該当する。

特にその中でも注目がキングカメハメハとの相性の良さ。タガノディアマンテ(20年万葉S)を筆頭に勝ち馬を量産しており、勝ち上がり率29.5%と低アベレージのオルフェーヴル産駒の中で52.9%の高アベレージは驚異的。今後もこの組み合わせには注目したい。

●代表例:ラッキーライラック・サラス・エスポワール・タガノディアマンテ

芝ダート問わない短距離種牡馬

キンシャサノキセキ

2003年生　鹿毛　生産／豪州産　繋養先／社台スタリオンステーション
競走馬時代の主な勝ち鞍／2010・11年高松宮記念、2009・10年阪神C、2009年スワンS

キンシャサノキセキってどんな馬？

　南半球産9月生まれでデビューは12月と遅かったが、キャリア5戦目のNHKマイルCで3着と素質の片鱗を見せた。しかし、その後は勝ち負けを繰り返し、初重賞勝利は5歳時の函館スプリントS。さらに7歳春に初のGIタイトルとなる高松宮記念を制し、翌年同GI連覇を最後に引退となった。スプリンターとしては珍しく長きにわたり芝短距離路線を牽引した1頭だ。

　産駒にもそのスピード性能はよく伝えており、1400m前後で活躍する馬が大半を占める。重賞2勝馬シュウジ(15年小倉2歳S、16年阪神C)をはじめ、モンドキャンノ(16年京王杯2歳S)、カシアス(17年函館2歳S)、ベルーガ(17年ファンタジー S)と中央重賞勝ちはすべて1400m以下でのもの。

　ただ、馬場適性は自身の活躍とは異なり、芝よりもダートの方が成績は優秀。中央でのダート重賞勝ちこそないが、地方交流重賞ではサクセスエナジー(18年かきつばた記念、さきたま杯、19年黒船賞)とヒラボクラターシュ(19年佐賀記念)の2頭の重賞ウィナーを出しており、年々地方競馬での存在感が増してきている。自身は芝レースしか出走がなかったが、立ち気味の繋と恵まれた馬格は産駒にも伝わっており、それが馬場適性をダート向きに転化しているのだろう。2歳～3歳春までは前向きな気性と非凡なスピードで芝重賞でも活躍する産駒が多いが、古馬になってから活躍するのはダート馬の方が圧倒的多数派。芝重賞で獲得したタイトルはすべて2、3歳時のもので、シュウジが古馬になってダート路線に転向したのも自然な流れだったといえる。

フジキセキ 青鹿毛 1992	*サンデーサイレンス 青鹿毛 1986	Halo	Hail to Reason	Turn-to
				Nothirdchance
			Cosmah	Cosmic Bomb
				Almahmoud
		Wishing Well	Understanding	Promised Land
				Pretty Ways
			Mountain Flower	Montparnasse
				Edelweiss
	*ミルレーサー 鹿毛 1983	Le Fabuleux	Wild Risk	Rialto
				Wild Violet
			Anguar	Verso
				PLa Rochelle
		Marston's Mill	In Reality	Intentionally
				My Dear Girl
			Millicent	Cornish Prince
				Milan Mill
*ケルトシャーン 鹿毛 1994	Pleasant Colony 黒鹿毛 1978	His Majesty	Ribot	Tenerani
				Romanella
			Flower Bowl	Alibhai
				Flower Bed
		Sun Colony	Sunrise Flight	Double Jay
				Misty Morn
			Colonia	Cockrullah
				Nalga
	Featherhill 鹿毛 1978	Lyphard	Northern Dancer	Nearctic
				Natalma
			Goofed	Court Martial
				Barra
		Lady Berry	Violon d'Ingres	Tourment
				Flute Enchantee
			Moss Rose	Mossborough
				Damasi

芝	ダ	距離		成長	昇級	短縮	延長	多頭	少頭	内枠	外枠
C	B	～1700		普通	D	B	D	D	B	C	B
直長	直短	急坂	平坦	芝悪	ダ悪	休明	間詰	その他			
D	B	B	D	C	C	C	C	大外枠：A、2歳戦：B			

馬券のトリセツ① 外枠

スプリント適性の高い種牡馬だが、自身が短距離路線を走ることとなった最大の要因は前向き過ぎる気性にある。産駒の短距離適性には当然この面も強く影響しており、代表産駒シュウジはまさにその典型例。特に馬群で我慢させるのは至難の業で、大外枠の成績が優秀なのはそのためだろう。ダートではその傾向は一層強まるため「ダートで外枠のキンシャサノキセキ産駒は買い」と覚えておきたい。

■ダート/大外枠:単勝回収率 141%　複勝回収率 102%

馬券のトリセツ② 短い直線&急坂

短距離血統はスローペースの瞬発力勝負に強いことが多いが、本産駒の場合、気性面によるスプリンター化が基本。そのため、道中で脚をタメられるタイプが少なく、レース終盤で最大限のスピードが求められる長い直線コースは不得手。特に芝の直線勝負では分が悪く、小回りでスピードを生かす競馬がベターだ。

また、急坂を苦にしないのも産駒の強み。自身のパワーは産駒にもよく伝わっている。特に直線の短い中山は大得意で、1600m以下に限れば複勝率、複勝回収率ともに優秀な成績を残している。その他、阪神(芝なら内回り)や中京でも高いパフォーマンスを見せており、直線急坂は得意とみて間違いないだろう。

馬券トリセツ③ 2歳戦

父は8歳時の引退レースでGⅠを制した晩成型であったが、産駒の成長曲線は標準型が多い。むしろ、中央重賞勝ちはすべて2、3歳時のもので前向きな気性と非凡なスピードは若駒時に生きることが多い。

ただ、決して早熟種牡馬ではない。特にダート馬はその傾向が強く、高齢になるほど複勝率は上昇する。シュウジの活躍はまさにその典型例で父の成長力は産駒にもしっかりと受け継がれている。

■2歳・～1600m:単勝回収率 95%　複勝回収率 96%

配合のトリセツ① His Majesty=Graustark

His Majesty系の特徴を薄く伝えるキンシャサノキセキ。Graustark＝His Majestyの血を持つ肌との間に活躍馬を多数出しており、サクセスエナジーやシュウジ、ヒラボクラターシュなどがこの配合パターン。上記の3頭はいずれもダートのOP競走に勝っており、Graustark＝His Majestyがダート向きの硬さやパワーを伝えていることがわかる。

●代表例:サクセスエナジー・シュウジ・ヒラボクラターシュ・カシアス

配合のトリセツ② Deputy Minister

「フジキセキ＋Deputy Minister」の相性の良さは有名でカネヒキリやミラクルレジェンド、サウンドトゥルー、ホワイトフーガといったダートチャンピオンを輩出。このニックスは孫の代でも効果的で「キンシャサノキセキ＋Deputy Minister」からはサクセスエナジーやジュエルクイーン(14年エーデルワイス賞2着)などが出ている。該当産駒のJRAでの勝ち鞍のうち70%弱がダートでのもので、父方のパワー要素をオンにすることが期待できる。

●代表例:サクセスエナジー・ジュエルクイーン・ジュランビル

配合のトリセツ③ 主張の強い母馬

本馬は濃いクロスを持たないため、クロスが濃い繁殖牝馬と相性がいい。代表産駒シュウジの母がNashua≒Nantallahの4・6×5である他、OP馬スマートカルロスは母がHyperionの4・6・6×5・6・8、同ストロベリームーンは母がMr.Prospectorの3×3といった具合だ。クロスのきつい肌馬にはクロスの弱い種馬を、逆にクロスの弱い肌馬にはクロスのきつい種馬を付けるのは配合のセオリーであり、キンシャサノキセキに限らず配合を考える際には留意しておきたい。

●代表例:シュウジ・スマートカルロス・ストロベリームーン